

第1章 西トップ遺跡調査修復事業 10年目を迎えて

2021年、西トップ遺跡調査修復事業は開始から10年目の節目の年を迎えた。これまでの多くの方々のご支援・ご協力によって、順調に調査修復事業を推進することができている。本章では、当修復事業の推移を順を追って記すとともに、これまでの当事業で判明した西トップ遺跡に関する新たな知見をまとめる。

第1節 西トップ遺跡の調査

平成13年度、奈良文化財研究所はタニ窯跡に続く新たなカンボジア事業の調査地に関し、現地の文化財保護組織 APSARA（アンコール・シェムリアップ地域遺跡保護整備機構）と協議をおこなった。遺跡の選定にあたっては、当時 APSARA の遺産局長であったアン・チュリアン氏と協議を重ね、アンコール・トムの遺跡群の中でも遺跡存続年代が比較的長く、仏教的な要素も濃い遺跡として、西トップ遺跡（第1図）を調査対象地として選定することになった。

西トップ遺跡は、アンコール・トムの中心、バイヨンから西門へ至る東西道路を西へ500mほど進み、さらに南へ50mほど下がった位置にある。これまでその存在は知られていたが、詳細な調査研究がなされていなかった。アンコール王朝の局勢期であるバイヨン期よりも後世のアンコール・トム内の遺跡のあり方や、アンコール王朝滅亡後の、ポスト・アンコール期をも対象に含める広範囲な時代設定の元に調査を開始した。平成15年（2003）8月の第1次発掘調査を皮切りに鋭意調査を進め、平成22年度にはそれまでの調査結果をまとめ、日本語版と英語版の報告書を刊行した（1、2）。

（1） 奈良文化財研究所 2011 『奈良文化財研究所学報 88 西トップ遺跡調査報告－アンコール文化遺産保護共同研究報告－』

（2） Nara National Research Institute for Cultural Properties, 2012, *Western Prasat Top Site Survey Report on Joint Research for the Protection of the Angkor Historic Site*.



第1図 西トップ遺跡修復前全景（東から）

第2節 修復に至る経緯

2008年5月26日、中央祠堂東側破風部分の石材40個あまりが落下した。その前々年にカンボジア側により中央祠堂頂部に繁茂していた樹木が伐採されたために、樹根が抱えていた石材が不安定となり、崩落したとみられる。この石材落下に伴ってかろうじて均衡を保っていた中央祠堂上部の石材が全体が不安定化した。急遽、APSARAと協議を重ね、日本国政府アンコール遺跡国際調査団（JASA）のご協力を仰ぎ、中央祠堂に足場材を架けて、祠堂本体を支えることとした（第2図）。APSARA、奈良文化財研究所をはじめとする国内外の関係者による協議を経て、独立行政法人次期第3次中期計画（2011年度から2015年度）より修復工事に着手することが決定された。修復の決定にあたっては（株）タダノと飛鳥建設株式会社をはじめとした多くの方々のご協力が大きな原動力となった。2008年、（株）タダノからは修復に不可欠な16tラフテレーンクレーンをはじめ、スーパーデッキ、カーゴクレーン付きトラックのご提供を受けた（第3図）。飛鳥建設株式会社からは発電機など機材のご提供だけでなく、（株）タダノとの調整、解体作業開始後は石材の加工や接着に関する技術指導をいただいた。

修復開始にあたっては、中央祠堂と比べ小型の南北両祠堂から着手することにした。南北両祠堂では、南祠堂の方が躯体部の残りが良好であるとともに、石材が大きく解体の手間が北祠堂と比べ少ないと推定されたため、南祠堂の解体修復で工法・進行等の習熟度を高めた後、続いて北祠堂、中央祠堂の順に解体修復を進めることとした。2011年度後半からは、解体修復に必要な現場設備の準備・整備を進めた。2011年12月14日にAPSARA・東京文化財研究所・奈良文化財研究所間で新たな覚書を交わし、2012年3月9日より解体作業を開始した。



第2図 足場材設置状況（東から）



第3図 寄贈機材

第3節 南祠堂の修復

南祠堂躯体部・上成基壇の解体

南祠堂は躯体部・上成基壇・下成基壇からなる（第4図）。屋根にあたる屋蓋部はほとんどが失われ、躯体部は南に約19度傾いていた。上面から順に1層ずつ平面図作成、石材番付、解体を繰り返し、躯体部の解体を進めた。解体した部材は、地上のコンクリートベース上で組み上げ、仮組をおこない、水平や位置調整、欠損石材などの確認をおこなった。

続く上成基壇解体時には、転用石材を複数確認した。中でも特筆されるのが、シーマ石（結界石）と呼ばれる石材が構造材として転用されていたことである。通常、シーマ石は上座部仏教寺院の寺域を区画するために地中に埋められるもので、寺域の東西南北の四隅とその各辺の中央部に設置される。シーマ石は2石1組として据え付けられるため、合計8か所に2石ずつ各寺院に設置されることが通例である。南祠堂では上成基壇から12点、続く下成基壇最下層からも2点のシーマ石（第5図）が発見された。おそらく、元来どこかの寺院に据えられていたものを、南祠堂の構造材として転用されたものと考えられた。



第4図 南祠堂修復前状況（東から）



第5図 南祠堂下成基壇最下段（N24）検出シーマ石（南から）

南祠堂基壇部の解体

下成基壇最上面は砂岩敷石面であったが、不等沈下を起こし、中央部から南にかけて 20cm 以上沈下した状態であった。敷石面を解体すると、基壇内に充填されていた基壇土が赤褐色の粗砂であることが判明し、また版築のような基礎構造は見られなかった。この基壇土を発掘すると中央祠堂下成基壇の南階段が検出された（第 6 図）。

検出された中央祠堂下成基壇南階段

この中央祠堂下成基壇の南階段は状態もよく、不等沈下は起こしていなかった。このことから、南祠堂躯体部の傾斜の原因が判明した。経年変化などの原因により、南祠堂下成基壇外装のうち南西隅の羽目石が崩落、隙間から基壇土が外側に流出し、基壇中央部の沈下が起こった。一方、中央祠堂南階段に載っていた南祠堂北側は沈下することはなかった。そのため、躯体部全体が南に傾斜するとともに、屋蓋部の倒壊が起こったと推定された。また基壇土内からは青銅製鈴や陶磁器片など数点のみが出土した。検出された中央祠堂下成基壇南階段は、再構築の際に再び埋め戻すことになるため、最大限の記録採取に努め、実測、3D 測量と写真撮影をおこなった。



第 6 図 中央祠堂下成基壇南階段検出状況（南から）



第 7 図 南祠堂基礎地業検出状況（南西から）

南祠堂基壇の基礎地業

解体と並行して基壇外周部で発掘調査をおこなった。基壇西側に幅 1m、長さ 3m のトレンチを設定し、掘込地業の確認をおこなったがこの部分では掘込は確認できなかった。その後、現地表下約 2m まで掘り進めたが、遺物の出土が続き、地山の確認には至らなかった。このことから、西トップ遺跡では遺跡の立地する範囲を少なくとも 2m 以上の盛土で整地した上に現在の伽藍を建立していることが明らかとなった。

基壇部最下層の調査では、現基壇の南側延石直下から基礎の掘込地業が確認されるとともに、石列が検出された（第 7 図）。これらの石列は砂岩またはラテライトブロックを縦置きに並べ、東西南北に組み合わせて作られていた。また掘込地業南掘込線のすぐ南から、黒褐釉長頸壺と無釉陶器の丸底壺・長頸壺などが出土した。一部掘込地業の深さを確認する断割トレンチを南北方向に入れたのちに全体を埋め戻し、再構築をおこなった。

南祠堂基壇の再構築

2014 年 10 月からは基壇下の地業部から再構築に取り掛かった。再構築にあたっては、基礎地業や基壇内に充填されていた赤褐色粗砂層の地質調査成果に基づいた改良土を用いて、版築をおこない（第 8 図）基壇土の強化を図った。

2015 年 9 月 23 日には、無事南祠堂の調査修復を完了し、南祠堂の再構築完成の式典を挙行することができた。南祠堂屋蓋部に関しては、東面と北面の破風下端の桁材部分まで再構築をおこなった（第 9 図）。調査の詳細については、修復報告 2 を参考されたい（3）。



第 8 図 南祠堂再構築作業状況

（3） 奈良文化財研究所、2015、『西トップ遺跡調査修復中間報告 南祠堂解体編 2』



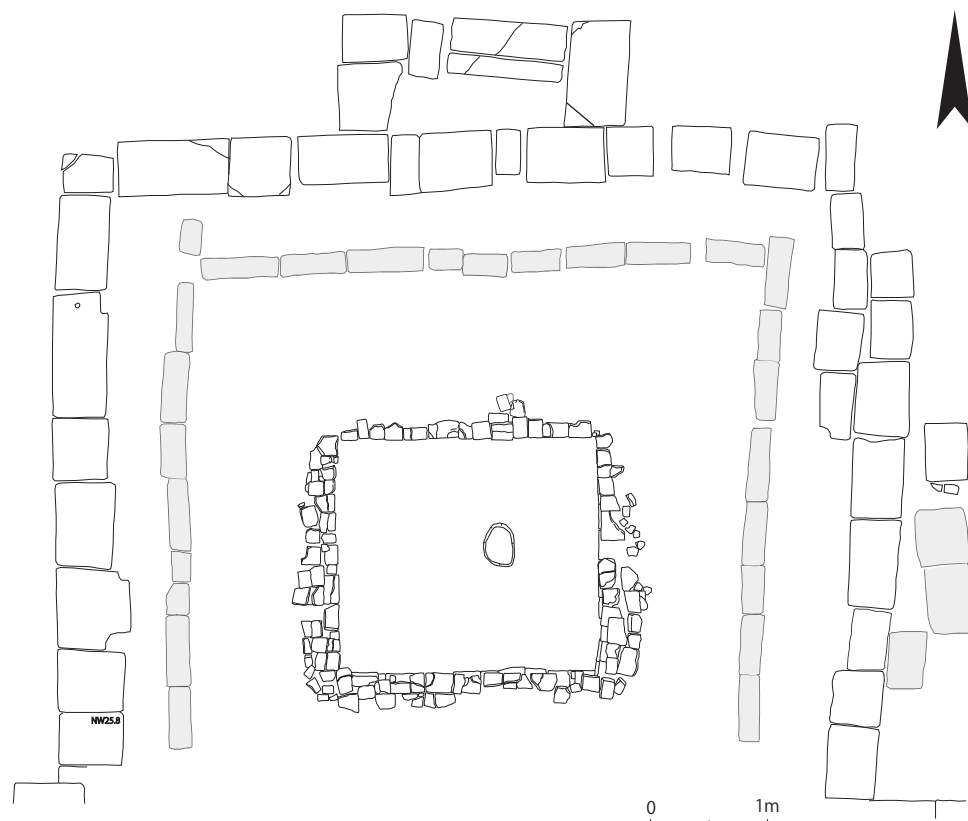
第 9 図 南祠堂再構築状況（東から）

第4節 北祠堂の修復

2016年2月、北祠堂の解体に着手した（第10図）。北祠堂は全体が北側に倒れこんでおり、躯体部の崩壊が南祠堂と比べてより進んでいた。躯体部の一部の石材は崩落し躯体部内部に残されていたが、その他の多くの躯体部の石材はフランス極東学院により地上に整理され、特に北祠堂北側に雑多に置かれている状態であった。修復作業に先立ち、その石材一つ一つに番付をおこない、図面を作成するとともに、その石材が本来はどこに置かれていたかという原位置の特定をおこない、再構築に備えた。



第10図 北祠堂修復前状況（東から）



第11図 北祠堂基壇最下段・レンガ造遺構上面平面図

北祠堂基壇部の解体

2016 年 3 月に躯体部の解体が終了したのち、基壇部の調査に取りかかった。基壇部は北側に沈下しているものの旧状をとどめており、この段階で基壇の築盛状況などを知るために、基壇敷石を一部外し、南北にトレンチを設定した。その結果、基壇土は南祠堂と同じ赤褐色の粗砂を中心とするものの、所々に灰色粘土を交えて、厚さ約 10cm の整地を繰り返すような築成方法をとっていたことが判明した。さらにこのトレンチの底からレンガ列が検出され、基壇下面に何らかのレンガ造遺構が存在することが推定された。

レンガ造遺構の発見

2016 年 7 月に入り基壇部の解体を進めるとともに、レンガ造遺構の構成を明らかにするために、次は東西方向のトレンチも設定し、十字トレンチでレンガ列の状況の調査をおこなった。続く発掘調査で、レンガは一辺約 2m の方形にめぐることが明らかになり（第 11 図）、南祠堂とは違う何らかの地下遺構の存在が推定された。8 月にこのレンガ造遺構内部の埋土を発掘するとともに（第 12 図）、写真撮影、実測、3D 測量等をおこなった。その結果、これまでのアンコール遺跡群では例を見ない特殊な遺構を検出・調査することとなった（第 13 図）。当レンガ造遺構からは、金製品をはじめとした金属製品、水晶、ガラス製品、焼骨片などが出土した。また、レンガ造遺構ならびに出土遺物に被熱の痕跡が認められ、多くの炭化物の出土も確認した。この結果、当レンガ造遺構は 14 世紀後半から 15 世紀前半に位置付けられることが判明した。当該遺構ならびに出土遺物の分析結果に関しての詳細は、修復報告 5 を参照されたい（4）。

（4） 奈良文化財研究所、2018、『西トップ遺跡調査修復中間報告 5 北祠堂レンガ遺構編』

第 12 図 レンガ造遺構発掘作業風景



第 13 図 レンガ造遺構検出状況（南から）

北祠堂偽扉の再構築

レンガ造遺構に関して詳細な調査をおこなった後、遺構保存のためにオリジナルの赤褐色粗砂を主とした改良土で埋め戻し基壇の再構築に取りかかった（第14図）。躯体部再構築にあたっては周囲の散乱石材から当初部材を発見し、元の場所に納めることを目指した。その過程で、躯体部の東正面を除く3面の偽扉と呼ばれる扉全てに如来立像があらわされることが判明し、それらを再構築することができた。

もともと、西面と南面の偽扉については、20世紀初頭のフランス極東学院の記録によってその存在が知られていたが、我々が現地に入った2000年代には既にその当時の現状を留めていなかった。

西面は如来立像下半身が現地に、上半身はアンコール保存事務所に収蔵されていた。文化芸術省のご高配を得て、2016年4月にアンコール保存事務所から西トップ遺跡現地に上半身を運び入れ、西トップ現地に残っていた下半身と組み合わせ復元した（第16図）。

南面はかろうじて如来立像の足部のみが原位置に残っており、それをもとに散乱石材中から上部を探し出し、復元することができた（第17図）。一方、大きく倒壊していたため古写真の記録にも残らず、その図像を全く推定できなかった北面の如来立像は、散乱石材の詳細な調査によって全身を復元することができた（第18図）。興味深いことに、北面の如来立像は、南面・西面とは様相を異にし、通常の立像ではなくいわゆる遊行仏に近い図像であることが判明した。

北祠堂の再構築

2017年8月には北祠堂の基壇部の再構築が終了し、躯体部の再構築を進めた。北祠堂は南祠堂と比べ躯体部の崩壊の度合いが大きく、周辺の散乱石材中から多くの部材を探し出す必要があった。現地での詳細な調査により散乱石材から多くの石材を北祠堂に設置することが可能となったが、それでも発見できない、または破損のため再構築に耐えられない部材に関しては、新しい砂岩材で補完した（第15図）。2017年12月、全作業を完了した（第19図）。



第14図 北祠堂下成基壇再構築作業風景（北西から）



第15図 北祠堂ペディメント新材彫刻作業風景（東から）



第16図 北祠堂西面偽扉再構築状況（西から）



第 17 図 北祠堂南面偽扉再構築状況（南から）



第 18 図 北祠堂北面偽扉再構築状況（北から）



第 19 図 北祠堂再構築状況（東から）

第5節 中央祠堂の修復

2018年1月より中央祠堂の解体調査を開始した。これまでの南祠堂、北祠堂と同様に上部から順番に解体した。中央祠堂は他の2祠堂に比べて規模が大きく、屋蓋部から順番に慎重に外した（第20図）。解体した石材は、順次仮組をおこなった。2018年8月から9月にかけては、基壇部上面の敷石と扉枠の精査をおこない、10月には扉枠を解体した。これら解体した全ての躯体部の部材を組み合わせ、コンクリートベース上での躯体部の仮組が完了した。

中央祠堂基壇部上面の調査

2018年8月には躯体部が解体された上成基壇部上面の調査をおこなった。基壇部上面の砂岩敷石は中央部に転用石材と思われる方形石材がはめられ、そこが不等沈下を起こし、不揃いとなっていた（第21図）。この敷石を外すとラテライト敷石があり、やはり中央部に石の乱れた個所の存在を確認した。その部分を発掘調査した結果、ラテライト敷石の下にさらに3段分のラテライト敷石が存在し、その中央部にラテライト敷石を破壊して盗掘孔と思われる縦穴が穿たれていることが判明した。アンコール遺跡群の諸遺跡によくみられる塔中央の盗掘孔と考えられ、ここからは近代の針金片などが出土した。深さ2m余りまで調査を継続したが盗掘孔は続いており、調査の安全と基壇の耐荷重性を考え、この時点で調査を終えることとした。盗掘孔内には砂岩やラテライトが乱雑に埋め戻されていたが、発掘調査後の埋め戻し時には改良土で埋め戻し、上部荷重に耐えられるよう処置をおこなった。



第20図 中央祠堂修復前状況（北東から）



第21図 中央祠堂上成基壇上面敷石面検出状況（北から）



第22図 中央祠堂ラテライト基壇調査風景（北東から）

中央祠堂基壇部の解体

基壇部の解体には、いくつかの課題があった。そのうち最も重要な課題は、20世紀前半にフランスのアンリ・マルシャルによって提唱された説で、「外側の砂岩外装の内側にまた別のラテライト基壇が存在する」ことであった(5, 6)。実際、奈良文化財研究所による建築調査においても中央祠堂基壇の砂岩外装の内側にラテライト基壇が存在することが確認されていた(第22図)。そのため、調査の手順として、砂岩外装のみ順次1/4ずつ解体し、露出したラテライト基壇の調査をすることとした。まず東南1/4を部分的に解体してラテライト基壇の残存状況を確認、その後、西南、北西と解体を進めていった。

中央祠堂ラテライト基壇

ラテライト基壇は上述の通り1/4ごとに解体を進め、その都度写真撮影と3D測量をおこなった(第23図)。その結果、ラテライト基壇も外装の砂岩基壇と同様に上成、中成、下成の3段構成であった。上成基壇と下成基壇はモルディングの少ない石材を組み合わせ、下成基壇では延石2段、地覆石1段、羽目石3段、葛石1段で構成されていることが判明した。中成基壇は羽目石の中段に丸みを帯びて突出するモルディングが施されていた。

中央祠堂の再構築

中央祠堂基壇部砂岩外装の解体は順調に進み、2019年秋にはラテライト基壇の北面から東面を含めた全面が明らかになった。ラテライト基壇は解体せず、一部補修をおこなうにとどめた。オリジナルの基壇を保存するため、ラテライト基壇の3D測量、写真撮影などできうる限りの記録保存をおこなった。また、同時に進めていた東正面の仏像台座と仏教テラスの発掘を経て、仏像台座の再構築をおこなった。その後、中央祠堂基壇部の再構築を進め、2021年1月段階で躯体部の再構築作業を続けている状態である。

(5) Marchal, Henri. 1918. "Monuments Secondaires et Terrasses Bouddhiques d'Angkor Thom". *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*. Tome 18 (8), 1-40.

(6) Marchal, Henri. 1925. "Notes sur le monument 486 d'Angkor Thom". *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*. Tome 25 (3-4), 411-416.



第23図 中央祠堂ラテライト基壇検出状況(北東から)